



写真 1 円形公園からみた国立駅舎：1988（昭和 63）年 5 月頃

### はじめに

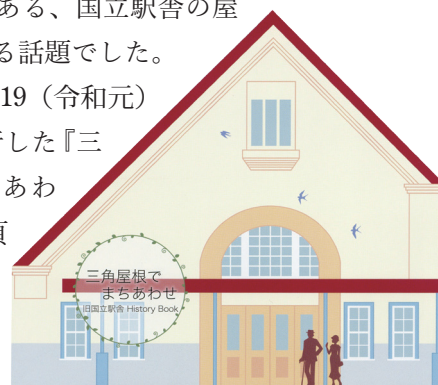
国立市広報担当から当館に移管された写真資料からピックアップしてのご紹介。今回は、当財団広報誌『オアシス』4・5月号に掲載した、明るい色味（オレンジ色）の屋根をした国立駅舎を紹介します。

早いもので「令和」の元号も既に3年目に入りましたが、上の写真は「昭和」の末期にあたる1988（昭和63）年に撮影された1枚です。この翌年、1989年1月7日に「平成」と改元され、翌8日から平成がスタートしています。当時の小淵恵三官房長官が、白木の額に入った「平成」の2文字を掲げているニュース映像は、昭和生まれ世代ならご記憶の方も多いのではないでしょうか。そして既に世は「令和」へと移り、「昭和100年」まであと数年となっています。「“昭和”も遠くになかりけり」と詠ぜられてしまうのも、そう遠くないことのように。歳月の流れは誰にも止められません。

さて、この1988年2月下旬の新聞を探ってみると、1990年度までの完成を目指して、郷土の文化財を展示・収蔵する文化施設の建設構想が国立市から明らかにされたと報道されています<sup>1</sup>。そうです、その後1994（平成6）年に完成（11月17日開館<sup>2</sup>）することとなる当館（くにたち郷土文化館）の建設のことです。

そして、この報道がなされた同じ時期に、国立市でもうひとつホットな話題が持ち上がります。それが上の写真にある、国立駅舎の屋根の色に関する話題でした。

国立市が2019（令和元）年11月に刊行した『三角屋根でまちあわせ』16・17頁には「旧国立駅舎のトリビア」が掲載されています。



『三角屋根でまちあわせ』

1 『サンケイ新聞』朝刊（1988年2月25日、21面 多摩）「郷土資料館建設へ市内発掘の遺物一堂に」、『読売新聞』朝刊（同日付、22面 多摩読売）「16億円で郷土文化施設 国立」。

2 『市報くにたち』第587号（1994年11月5日、1面）「開館 くにたち郷土文化館」。なお、『市報 くにたち』（1987・昭和62年1月5日 第457号以降）などの国立市の刊行物は、市のホームページからデジタルブックで閲覧することができます。

くにたちデジタルライブラリー

国立市 HP : <https://www.city.kunitachi.tokyo.jp/soshiki/Dept01/Div01/Sec02/gyomu/0358/0360/0363/1519978218670.html>

そのひとつ（トリビア5）に「幻のオレンジ屋根」として採り上げられていますので、この話題をご存じの方もいらっしゃることでしょう。当時を知る人にとっては、その事の顛末もまだ記憶に新しいかもしれません。しかし、私を含めて当時の状況を知らない人にとっては、どのように事が推移したのか、その経緯を詳らかに把握できておらず、ただただ「国立駅舎の屋根が明るく塗り替えられて、それがまた元に戻された」という結果論でしか捉えられていないのではないのでしょうか。お恥ずかしながら、私もそのような認識しかありませんでした。先日、当館の学芸員と旧国立駅舎オープン1周年に関して話をしていた際、自分の認識があまりにも貧弱なのを痛感し、「それでは、一丁調べてみるか!」と資料を漁り出したのがこの写真紹介の発端です。

1988年に生じたこの“駅舎トリビア”については、幸いなことに新聞各社から幾つもの報道がなされています。それに拠って事の経緯をある程度捕捉することができました。そこからは、国立駅舎をまちのランドマークとして愛する多くの人々の存在と、それに応えるべく市民や国立駅利用者の意向を反映せんとした当時のJR側の積極的な対応があったこ

**検出新聞記事一覧**

No.	新聞名	日付	掲載面	記事タイトル	サブタイトル
①	朝日新聞 朝刊	4/14 (木)	30面	駅の屋根 お色直し2度も	オレンジ色に住みびっくり 民営JR すぐ「元に戻します」 国立
②	毎日新聞 朝刊	4/14 (木)	24面 多摩	JR国立駅の三角屋根 市民に不評で 塗り直し	色が派手
③	読売新聞 朝刊	5/01 (日)	18面 多摩読売	「オレンジ」に賛否両論で乗降客に アンケート	国立駅とんがり屋根の色
④	毎日新聞 朝刊	5/13 (金)	24面 多摩	中央線国立駅 三角屋根どんな色が いい 利用者の“直接選挙、決着	オレンジ色で大論争 15日まで投票 中です
参考	読売新聞 朝刊	5/14 (土)	25面 第三多摩版	エンジョイまっぶ 大学通り 国立	おしゃれな学生の街
⑤	毎日新聞 朝刊	5/17 (火)	20面 多摩	今週中には決定「屋根の色アン ケート」終了	国立駅
⑥	サンケイ新聞 夕刊	5/20 (金)	1面	やります民営JR 反応素早く 駅舎 の色も市民投票で	国立駅の三角屋根 結局赤レンガ色 に「お客のためですから」100万円 かけ一新したばかり
⑦	毎日新聞 朝刊	5/21 (土)	20面 多摩	赤さび色に“再変身、	国立駅の三角屋根 住民アンケート で決定
⑧	東京新聞 朝刊	5/21 (土)	21面 多摩版	国立駅の屋根『元の色』に塗り替え	景観論争 お客の投票で決着
⑨	サンケイ新聞 朝刊	5/21 (土)	21面 多摩	「オレンジだめ」は8割 アンケート 結果発表 駅長さん“残念、	国立駅三角屋根の色問題
参考	読売新聞 夕刊	5/23 (月)	1面	よもうり寸評	
⑩	読売新聞 朝刊	6/09 (木)	24面 多摩読売	景観論争でアンケート 鉄さび色に 塗り直し	JR国立駅のとんがり屋根
⑪	産経新聞 朝刊	6/11 (土)	20面 多摩・武蔵野	“お色直し、スタート	JR国立駅の屋根 1週間で赤レンガ 色に
参考	産経新聞 朝刊	6/14 (火)	20面 多摩・武蔵野	途中下車 中央線・国立駅	モダンな三角屋根

上記一覧は主として『国立市関係新聞記事』から検出したものです。なお、同資料に記載のない情報については、国立国会図書館および日野市立中央図書館所蔵のマイクロフィルム資料から抽出・補足をしています。

とを知ることができました。この国立駅舎にまつわるひとつのエピソードについて、調査結果を報告することもあながち無駄にはならないのではないかと  
の思いから、この度の写真紹介と相成りました。

**国立駅の屋根塗り替え・塗り直し**

**新聞報道**

今回検出した新聞記事については、下記一覧のとおりです。下表のNo.①～⑪の記事を主に利用して、「国立駅舎の屋根塗り替え」について紹介しますが、典拠とした記事に関しては、便宜上「記事①」というように下表のNo.で表記します。また、No.の欄に「参考」とあるものは、駅舎の屋根塗り替えにスポットを当てた記事ではないものの、それに関する記述があるものを挙げています。

なお、この紹介で新聞各社の報道内容を確認する際、くにたち中央図書館所蔵の『国立市関係新聞記事』（昭和63年1月～4月、同5月～8月）を主に用いました。これは、くにたち図書館で国立にまつわる新聞記事を細かにピックアップしてまとめ直し、それを日付順に綴ってあるものです。『国立市に関する新聞記事索引』を用いれば、各トピックか



ら記事の検索もできます。国立の地域ネタを調べるのに大変重宝する資料で、私も活用させてもらっています。ご興味ある方は是非、くにたち中央図書館で閲覧してみてください。

### 屋根塗り替え

さて、前置きがだいぶ長くなってしまいましたが、1988年2月下旬、国立駅舎の屋根の色が塗り替えられました。この時期に進められた改修工事に際して、風化・老朽化の目立っていた国立駅舎の屋根を、補修と併せて塗り替えたようで、その費用は100万円であったとされています<sup>3</sup>。この塗り替え時期については、「二月末」（記事①）、「二月下旬」（記事⑧・⑩）との記述から概ねの時期が知れますが、記事⑥には唯一その日にちが提示されています。それに拠ると、2月12日から塗り替えを開始、26日に完了しており、この間に塗り替えられたようです。

日本国有鉄道(国鉄)が分割・民営化されJRグループ各社が誕生して2年目を迎えようとしていたこの時期、JR東日本管内の主要駅では駅舎の塗り直し工事が進められており、「駅はお客さんとの重要な接点の場」であるとして、駅の美化などが行われていました<sup>4</sup>。

国立駅の屋根の塗り替えでも、この民営化2年目を迎えるという状況が影響を与えていたようです。新聞各社が「新生JRのイメージを加味して」（記事①）、「JR一周年ということで明るさを強調した」（記事⑥）、「新生JRにふさわしいように」（記事⑩）と報じているように、塗り替えの色味を決めるにあたって、民営化された新たな組織としての若々しい気分とそのイメージを表出することが意識されていました。そのことが補修時の色（赤さび色）よりもより明るい色（オレンジ色）をチョイスすることへと繋がっています<sup>5</sup>。

この屋根の色味決定については、気になる報道がされています。屋根の塗り替えを行うにあたり、絵画や古い写真といった資料を参照していた可能性が

指摘されているのです。

記事①では「昔の絵などから、建築当時の色をオレンジ系と推定」したと述べ、記事②では「JR東日本武蔵野建築区<sup>6</sup>に相談、古いカラー写真を参考に」したとされています。いずれの記事でも、典拠とした資料の色よりも明るい色味にしたと報じており、塗り替えられた色が推定復原した色のままではないようですが、当時のJR東日本には、創建当時の屋根の色を推し量れるような資料が何かしら保存されていた（或いはその所在を知っていた）のかもかもしれません。この点はまだ調査できていませんが、駅舎の変遷を知る上でも今後注目しておくべきポイントと考えています。

### 塗り替えへの批判

この塗り替えられた屋根に対して、市民や駅利用者からJR東日本や国立駅へと抗議・苦情が寄せられることとなります。それは屋根の色が「派手すぎる」といった批判でした。この批判については、「苦情殺到」とも報じられていますが、当初の報道（記事①）で中村年次・国立駅長は、抗議の電話を「本数は七、八本だった」と述べています<sup>7</sup>。駅員の方が直接抗議・苦情を受けるといったこともあったでしょうが、苦情の電話が連日ジャンジャン鳴り響いたというよりも、実際はもう少し穏やかだったのではないでしょうか。

いずれにしてもこの屋根の色味についての批判を受けてJR東日本・国立駅は、「民営化の方針はお客様が第一」（記事①）、「お客さんの声だからやむをえません」（記事②）と、利用者の声を受け入れ、素早い反応で改めて塗り直しを決定しています。民営化のお陰であるとの報道もありますが、ただ単に批判が寄せられたから即座に塗り直すと決めたのではなかったようです。記事①では、批判を受けて「部内で検討を始め、三月末、再び塗り替えることに」と報じていますが<sup>8</sup>、記事②では、1988年4月2日のJR発足1周年に当たって「利用客のイメージアン

3 この時の改修工事が、屋根の補修工事だけだったのかは判然としません。また、屋根の塗り替えのみで100万円の費用がかかったとの報道もあります（記事⑥・⑨）が、その後の再塗装の費用が「十五、六万円」と報じられている（記事⑨）ことからすると、屋根等の補修と併せた塗り替え費用だった可能性もありそうです。

4 『サンケイ新聞』夕刊（1988年5月20日、11面）「旧国鉄時代なら『ムダ』と一蹴…他の駅も着々化粧直し」（記事⑥付随の記事）

5 『中央線 思い出コレクション』（けやき出版、2010年11月16日）の中で、「民間会社になって明るいイメージを出すために赤い三角屋根の色を塗装した」（90頁）と沼本忠次氏は述べられています（当該記述は、当館の中根学芸員から指摘を得ました）。

6 JR東日本武蔵野建築区については前掲註5の書籍で、「国立駅構内にあった武蔵野建築区（国立幼稚園前）」（90頁）と記されており、1988年の『ゼンリンの住宅地図 国立市』に拠ると、国立音楽大学附属幼稚園北側向かい（現国立駅南第1自転車駐車場）にあったようです。

7 記事③でも抗議の電話について、「苦言ばかりが八本」としています。ただし、記事⑥では「駅長室は毎日電話が鳴り続け」と報じています。

8 5月になっての報道ですが、記事③でも「同駅〔国立駅：引用者〕で検討した結果、三月末に塗り直しを決める」としています。

ケート」を実施、「約一割が『色が派手すぎる』と答えた」結果を受けて塗り直すことになったとしています。

この4月2日に関しては、当館所蔵の国立市広報移管写真中に記録が遺されています。「63.4.2 JR 国立駅1周年」とネガシートに記された23枚のモノクロ写真がそれです。当時の市報には、「カメラかついで」という欄があって、前月に行われた市内の催しや風物などを、写真に解説を付して2・3件程紹介していました。恐らく、この欄に掲載できるように撮影されたものでしょう。しかし、この4月2日の催事は市報<sup>9</sup>に採り上げられておらず、どのような催しであったのか詳細は不明です。新聞報道<sup>10</sup>に拠れば、4月2日と3日の土・日曜日の両日にわたって国立駅で「JR一周年祭」が開催されており、それを撮影したのがこれらの写真とみられます。

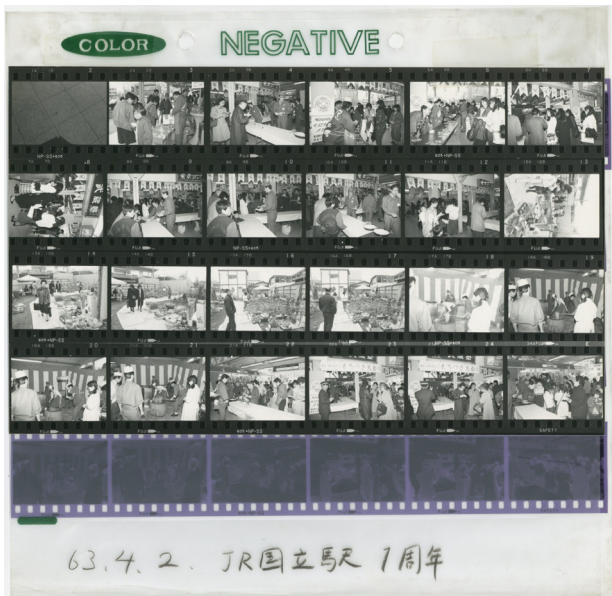


写真2 JR 1周年祭：1988年4月2日

記事②にある「利用客のイメージアンケート」とは、この1周年祭で集められたと考えられます。この時点の駅舎の屋根は明るい色味（オレンジ色）をしていたはずですが、広報移管写真の中には、屋根にスポットを当ててカラーで撮影されものは見当たりませんでした。

決定した屋根の塗り直しに関しては、同日付（4月14日）の記事①と②で内容にややバラツキがありますが、4月における塗り直しを「天気をみてすぐにも着工」（記事②）して、遅くとも「五月の連休には塗り替えを終え」（記事①）るとのことであったようです。その塗り直しの色は、「濃い茶系のレンガ色」（記事①）、「元の茶色」（記事②）とあることから、明るい色ではなく、2月下旬の補修前の濃い色味（赤さび色）に決められたとみられます。

#### 賛否両論の展開へ

記事①と②が報じられたのは、いずれも4月14日のことでした。この時点では、市民や利用者の声を受け入れたJR側の素早い反応により、改めて塗り直しが決定したことが伝えられていました。ところが、この国立駅の屋根塗り替えに関する報道は、5月に入ると新たな展開を示します。

この新展開を初めに報道したのが記事③です。これに拠ると、屋根の塗り直しを決めたことに対して、今度は塗り替えた明るい色味（オレンジ色）のままでもいいとの意見が寄せられることとなり、まさに「賛否両論が同駅〔国立駅：引用者〕に寄せられた」（記事③）ようなのです。これが5月の初日に報じられていることから、4月中旬の報道（記事①・②）などを受けて、塗り替えた色（オレンジ色）支持の意見が寄せられたのでしょうか。支持派の意見を報道から拾い上げてみると、「シャレた国立に合う色」「鮮やかでいい」（記事④）、「ナウい色」（記事⑥）「明るくなってよかった」（記事⑩）といったものがあつたようです。

余談ですが、記事⑥にある「ナウい」。昭和生まれにはなんとも懐かしい言葉ですが、現代の子ども達には通じるのか？と気になって辞書に当たってみると、ナナ何と、『広辞苑』<sup>11</sup>に載っていました！曰く「（ナウを形容詞化した昭和末の流行語）いまふうである。流行の先端をいつている。」の意。い

9 『市報くにたち』第475号（1988年5月5日）7面の「カメラかついで」には、80年ぶりの春の大雪、国立保育園への鯉のぼりのプレゼント、第11回さくらフェスティバルの3件が紹介されています。

10 『東京新聞』朝刊（1988年4月1日、21面多摩版）「多摩のこよみ4月」

11 『広辞苑』第7版 机上版（岩波書店、2018年1月12日）



やはや「ナウい」が辞書に載る時代とは…、やはり「昭和”も遠くになりけり」でしょうか。ちなみに流行語に関する辞典で確認したところ、この「ナウい」は1972（昭和47）年頃の流行語だそうです。前年あたりから「NOW」との英語表記で使用されはじめたのが、同年に仮名で「ナウ」などと表示されるようになり、後に「ナウい」となったとのことでした<sup>12</sup>。

脱線から戻りましょう。この「賛否両論」の評定。なかなか難しい問題です。4月の報道にあるように、既に元の色（赤さび色）に塗り直すことを国立駅側は決めていたわけですから、そのまま押し通すという方法もあります。しかし、塗り替えた色（オレンジ色）に対する市民や利用客の批判を受け入れて塗り直しを決めた経緯からすれば、塗り替えた色を支持する利用客等の意見を無下に扱うこともできません。皆さんならどう決着をつけますか？

#### アンケート調査

この評定について当時の国立駅・JR東日本は粋な解決方法を選択します。それは駅乗降客などの利用者に対するアンケート調査の実施でした。

「同駅〔国立駅：引用者〕では全国でも例のない『直接選挙』に踏み切った」（記事⑤）とも報道されていますが、駅舎という建築物に対する利用者や市民の意見を反映させるため、JR側がアンケート調査を行ったなどというのは、極めて珍しい事例なのではないでしょうか。鉄道関係の知識に乏しいため、他にも同様の事例があるのかもしれませんが、いざれにしても手間のかかる方法をチョイスしてまで、利用者等の声を反映させる配慮がなされました。

このアンケート調査は、4月30日から5月15日までの期間で行われたようです<sup>13</sup>。国立駅南口駅舎内改札口前の掲示板に、塗り替えた現在の屋根の色（オレンジ色）の他、徐々に濃さを増した4枚の色味サンプル<sup>14</sup>が調査のため掲示されています。このサンプル掲示については、記事④に「『私、あの色がいい』。掲示板の前で、ギャルも屋根の色彩選び」

と題した写真が大きく掲載されており、当時の状況を窺い知ることができます。この「ギャル」も、もはや聞かなくなっていて久しい言葉です。性分からして脱線したくなりますが、いつまでも話が進まなくなるので先に行きましょう<sup>15</sup>。

このサンプルに対して、アンケートではA) 塗り替えた屋根の色（オレンジ色）に対する賛否、B) 改めて塗り替えるならばサンプル4枚の内どの色味がいいかを質問し、改札口近くに置かれた用紙で回答・投票するようになっていました（記事③・④）。

アンケート調査の開始日に取材したであろう記事③（5/1朝刊）に拠れば、アンケート用紙は当初100枚用意されています。その後の記事④に拠ると、「調査開始当日に用意した百枚のアンケート用紙はその日のうちになくなる」といった状況だったようです。4月の「賛否両論」を経て、屋根の色への関心がかなり高まっていたことが察せられます。当時の国立駅長であった中村氏が、「ご意見をいただけるのも国立駅がそれだけ市民に愛されている証拠」（記事③）、「関心を呼んでいるのは国立駅が愛されている証拠」（記事④）とコメントしていますが、まさに市民や利用客の愛着が強い駅舎であったでしょう。5月8日段階の中間集計では、600通ものアンケートが回収されています（記事④）。

5月15日まで行われたアンケート調査の結果は、同20日に駅南口改札口へと張り出されたようで（記事⑨）、記事⑥以降になると、その結果に関する報道がなされています<sup>16</sup>。

A) 塗り替えた屋根の色（オレンジ色）について			
反対		996 票	80.8%
賛成		130 票	10.5%
どちらでも可		107 票	8.7%
B) 改めて塗り替える色味について			
濃い色味 ↓ 薄い色味	赤さび色	437 票	35.4%
	レンガ色	368 票	29.8%
	こげ茶色	246 票	20.0%
	薄いオレンジ色	52 票	4.2%
アンケート総数		1,233 通	

上表の集計結果は、記事⑦・⑨・⑩から抽出しています。なおB)に関する色味の表現は各紙で異なるため、それらを参考に作表者が便宜的に用いた名称としています。

12 鷹橋信夫『昭和世相流行語辞典』（旺文社、1986年11月10日）255頁  
 13 記事⑥・⑨では「先月〔4月：引用者〕三十日から十五日間」と報じられていますが、記事④の「先月〔4月：引用者〕三十日からアンケート調査を始めた」「十五日までの投票結果」、同⑤の「『屋根の色アンケート』は十五日で終わった」、同⑧の「四月三十日から今月〔5月：引用者〕十五日まで」、同⑩の「四月三十日から五月十五日まで」の記載に拠って判断しました。  
 14 記事④ではこの色味サンプルを「三十彩四方」としていますが、掲載写真からすると横長の長方形にみえます。  
 15 ちなみに「ギャル」も前掲註11の『広辞苑』に「女の子。若くて活発な娘」の意として掲載されています。なお、前掲註12の辞典では、1979（昭和54）年頃の流行語として紹介されています（294頁）。同辞典にある引用文に拠ると、ジーンズメーカーが女性用ジーンズにつけた名称（「ギャルズ」）から広まったとのこと。  
 16 記事⑤では「アンケート結果がまとまるのは十八日か十九日にずれ込む見通し」とあり、予想以上の回収数により集計結果発表の予定が遅れた可能性を窺わせています。

その回収総数は、何と1,233通！その内訳については前表のように報じられています。

A) の2月下旬に塗り替えられた色（オレンジ色）については、「賛否両論」が唱えられ、アンケート調査へと至ったものの、蓋を開けてみると約8割が「反対」を突きつけるという結果となりました。ただ、当時の若い世代にはこの色は人気があったようで、記事⑨では「小中高校生にはオレンジ色が人気」として、「中央線の色と同じでいい」「明るくて素敵」「セブン・イレブンみたいでカッコいい」という声を挙げています。

また、B) の改めて塗り替えをする場合の色味については、最も濃い色（赤さび色）が3割5分強の票を得てトップとなりました。最も票を集めたこの色味は、2月下旬の補修時に塗り替えられる前の色とほぼ同色であったようです。いつも見慣れていた色が人気を博したようで、やはりそこが一番“落ち着く”ということだったのでしょう。但し、色味が1段薄いレンガ色が3割弱、更に薄いこげ茶色が2割の得票を得ていますので、色味の選定では投票内でもある程度のバラツキがあったようです。このサンプルに供された4色がいったいどんな色であったのか大変興味のあるところなのですが、残念ながらそれを知り得るだけの資料が現状では見つかりません。

### 屋根の塗り直し（再塗装）

このアンケート調査の集計結果を踏まえて、国立駅・JR東日本は、改めて屋根を塗り替えることに決定しました。2月下旬に塗り替えたばかりの屋根を再び塗り替えるのですから、かなりの英断であったでしょう。「旧国鉄時代ならムダ...と百万円もかけたものを一新することはないでしょう」と当時のJR東日本の幹部がコメントしていますが<sup>17</sup>、「駅は利用者のためにある」（記事⑥）、「塗り替えて愛される駅になるなら、無駄ではない」（記事⑦）との中村国立駅長のコメントが端的に語っているように、駅の存在を利用者目線から推し量った結果がこの再塗装に結びついたようです。利用者の側に立って

サービスを提供するという、民営化により一層徹底された姿勢が見て取れますが、JRグループ各社誕生から2年目を迎え、民営化による変化に対して世間の期待がより高まっていた時期でもあり<sup>18</sup>、そのような時流が影響を与えたのかもしれませんが。

いずれにしても、国立駅舎の屋根は再度の塗り替え（実質的には「塗り直し」）となりました。その作業は、屋根瓦の水洗いが6月8日になされ、9日から12日において塗り直しが予定<sup>19</sup>されていましたが、雨天のため10日からの開始となっています（記事⑩・⑪）。この塗り直しに要する費用は約15万円也とのこと（記事⑦・⑨・⑪<sup>20</sup>）。こうして国立駅舎の屋根は、6月中旬には再び濃い赤系の色味（赤さび色）へと戻されたのでした。

1988年2月下旬の塗り替えから6月中旬の塗り直しまで、その間4ヶ月弱。この短い間ではありましたが、明るい色（オレンジ色）の屋根をまとった駅舎が、国立駅南口に鎮座していた時期があったのです。これも今となっては、国立駅舎にまつわる「歴史」のひとつと言えるものでしょう。

### 国立駅舎の屋根はどんな色味だったのか

#### 創建当初

この屋根塗り替えにあたって、「昔の絵」（記事①）や「古いカラー写真」（記事②）などが参考にされていた点については既に触れました。ただ、管見の限りでは、創建当初の駅舎の屋根がどんな色味だったのかを知る手がかりは発見できていません。

国立大学町を開発した箱根土地株式会社が作製した分譲地の案内には、大学通りから国立駅方面を撮影した写真を基に着色をしたものが遺されています（同じ写真を用いた絵葉書も遺存しています）。この案内は片面に記された案内文（「昭和に輝く国立大学町」）の内容からして、国立駅開業から1年余りが経過した1927（昭和2）年9月頃に作製されたと考えられるものです。

この案内の着色では、正面から見える駅舎の屋根はピンク色のような淡い赤色で表現されています。ただ、この色をそのまま鵜呑みにはできないのです。

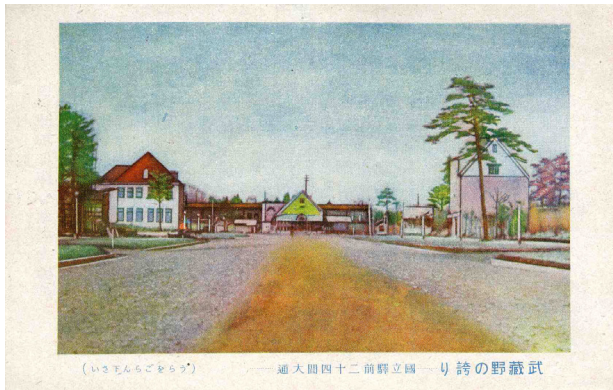
17 前掲註4と同じ。

18 『朝日新聞』夕刊（1988年3月14日、9面）「経済気象台 JR民営化後の一年」や、『読売新聞』朝刊（1988年3月31日、3面）「社説 JR二年目に望む黒字定着」など、JR発足2年目を迎えるにあたって経営やサービスへの期待を述べた報道がみられます。

19 10日からの作業開始を報じた記事⑩では、再塗装の作業期間を6月10日から「約一週間程度」としています。また、検出新聞記事一覧に参考記事として挙げた「途中下車 中央線・国立」（『産経新聞』朝刊、1988年6月14日、20面 多摩・武蔵野）では、「再度塗り替えをはじめた」と記しており、この記事の取材時ではまだ塗り直し作業が完了していないことが窺われます。

20 記事⑦では「十五万円かけて塗り替える」、同⑨では「再塗装に要する費用は十五、六万円という」、記事⑩では「費用は約十五万円」と報じられています。なお、記事⑪に拠ると、この再塗装に用いられたペンキは90%、つや出し剤が60%であったとのことです。





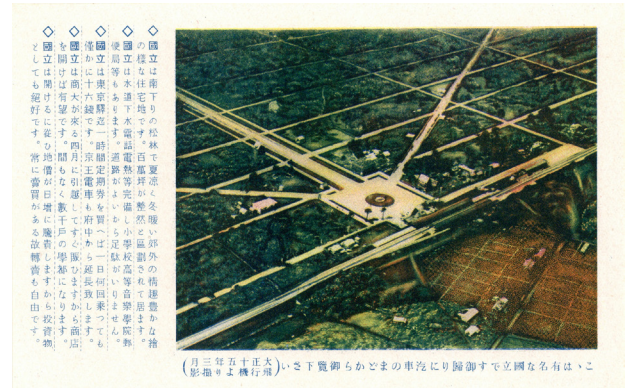
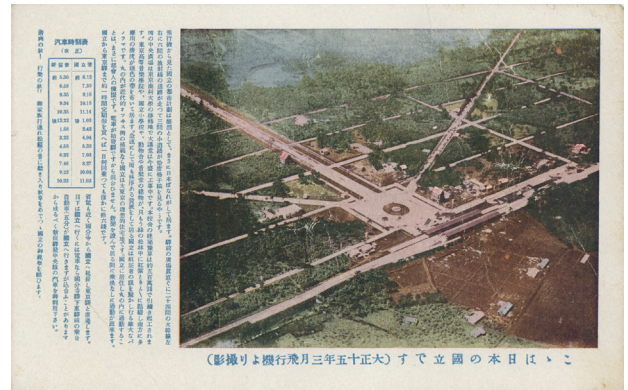
上：国立大学町案内「武蔵野の誇り…国立駅前二十四間通…」  
下：絵葉書「武蔵野の誇り（国立の大通）」

それは駅舎正面の壁面に、首を捻りたくなる部分があるからです。上の案内をよく見てください。駅舎の正面が黄緑色に塗られているのがお分かりいただけますでしょうか。この点がまず気になります。ただ、壁面が絶対に黄緑色ではなかったとも断言できませんから、この点を譲ったとしても、同じ壁面の下部を淡い水色に塗り分けている点はいただけません。創建当時のモノクロ写真からしても、駅舎正面の壁が2色に塗り分けられていたとは考えられません。

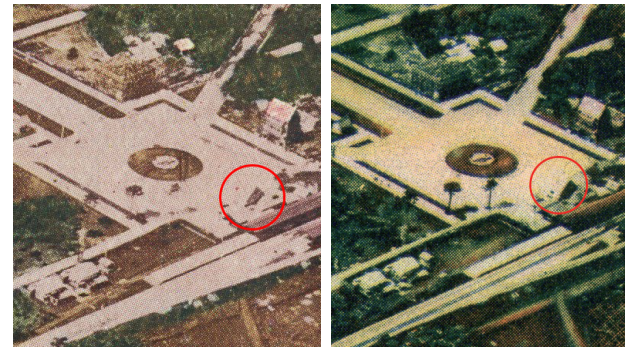
この案内になされた着色は、現実の色に関係なく色付けされたところがありそうです。実際の景色に基づいた着色であったならば、創建当時の駅舎の色味を知る貴重な手がかりになるのですが、そこまで信用できるものではなさそうです。

他にも箱根土地株式会社が作製した絵葉書や案内には航空写真に着色をしたものが知られています。

右上の絵葉書は、案内文の内容から1926(大正15)年の秋頃に作製されたとみられるもので、「大正十五年三月飛行機より撮影」とある写真に着色がなされています。その下の国立案内は葉書サイズのチラシで、片面に記されている案内文の内容から、1927年3月に作製されたとみられ、絵葉書と同じ



上：絵葉書「こゝは日本の国立です」  
下：国立案内



左：絵葉書「こゝは日本の国立です」の拡大、右：国立案内の拡大 いずれも赤丸部分が国立駅舎

航空写真に着色をしたものです<sup>21</sup>。

いずれも比較的丁寧に着色がなされていますが、残念ながら国立駅舎については、ほぼ着色がされていません。これらの資料からも創建当時における駅舎の屋根の色味を知り得ることはできません。

開発間もない頃の国立にあつて、駅舎は分譲地を代表する建築物のひとつで、箱根土地株式会社による分譲案内等に写真が掲載されています。着色をした案内や絵葉書で、駅舎を主体としたものを未だ経眼していませんが、同社作製の絵葉書などで綺麗に着色された国立駅舎の写真が出現するかもしれません。そのような幸運に巡り合えることを期待しています。

21 この案内の詳細な検討や写真の撮影時期への疑問については、資料紹介で以前取り上げていますので、そちらをご参照ください。「『赤い三角屋根』誕生—国立大学開拓の景色—」展 展示資料の紹介-2：国立大学町を収めた航空写真は、いつ撮影された？ 当館 HP：https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/ 『赤い三角屋根』誕生—国立大学町開拓の景色-2/



屋根の補修・メンテナンス

風雨から木造建造物を守る屋根は、屋根瓦の補修や塗り直しなどのメンテナンスが定期的により必要となります。創建以来 80 年余り駅舎として使用され続けた国立駅舎は、その間に何度か屋根の補修が行われたものと考えられます。現に、今回紹介した屋根の塗り替えも補修とセットで行われた可能性が指摘できます。また、記事②では「同駅〔国立駅：引用者〕のシンボルとなっている三角屋根は、二十年以上前に塗られたまま、汚れた茶色になっていた。」と述べており、以前に行われたメンテナンスに言及しています<sup>22</sup>。国立駅舎に係る工事記録をみても、1958（昭和 33）年 12 月の作製年月を有する工事図面には、屋根の補修工事の行われたことが示されています<sup>23</sup>。こうなると創建当初の屋根の状態がどこまで継承されていたのか、逆に言えば補修等における改変がどの程度加えられていたのかを、現在から探るのは簡単ではなさそうです。

現段階で国立駅舎の屋根の色味を知ることのできる資料のうち、年代を遡れる資料としては、国立文教地区協会による「文教地区 国立」の絵葉書セット 8 枚中にある 2 枚の絵葉書があります。

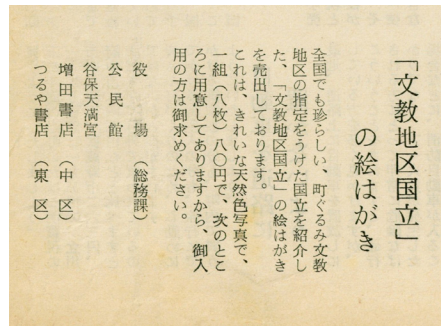
この絵葉書セットは、1959（昭和 34）年 5 月 1 日付の国立町報『くにたち』第 58 号で、売出しの記事が掲載されていることから、この頃に撮影された写真に基づいて作製されたと考えられます。

ただし、「中央線・国立駅」の絵葉書では改集札上屋の色味について疑問が提起されており<sup>24</sup>、「国立・駅前広場」の絵葉書にも着色等の可能性がみられ、何かしらの加工が施されているかもしれません。ただし、当時の住民が納得する色に近づけることはあっても、疑問を抱くような色へと加工することはないでしょう。その点で当時の屋根の色味を知る上で、参考となる資料であるといえます。

絵葉書の作製時期から考えて、前記 1958 年 12 月作製の図面にある屋根の補修工事との関係性が気になるところです。ただ、この絵葉書に収められている屋根が、工事前後のいずれであるのかは、絵葉書だけから断ずることはできません。



『文教地区 国立』絵葉書セットより  
上：中央線・国立駅 下：国立・駅前広場



国立町報「くにたち」第 58 号掲載記事

経年変化

1988 年 6 月中旬に塗り直された国立駅舎の屋根は、その後 2006（平成 18）年 10 月に駅舎としての役目を終えるまで、屋根の補修などで再び塗装されたのかどうかははっきりしていません。ただ、塗り直しから 8 年後の次頁の写真（写真 3）をみると、屋

22 記事④にも「三角屋根は二十年以上前に塗られたままで」とあります。

23 「国立駅本屋屋根その他災害復旧工事」（1958・昭和 33 年 12 月）。この「災害復旧」とは、同年 9 月 17・18 日の台風 21 号や、同月 26 日襲来の戦後最大級と称された台風 22 号などによる被害の復旧と考えられます。なお、再築された旧国立駅舎でも、屋根の定期点検時期を 1 年、瓦の割れ・劣化といった改修の診断時期を 10 年としており、定期的なメンテナンスが必要とされています（いずれも国立市所蔵旧国立駅舎再築関係資料より）。

24 国立市の資料では、改集札上屋の亜鉛鉄板瓦棒葺き屋根は黒色（コールタール塗り）であるはずのところ、当絵葉書で赤錆色となっている点について疑問が提起されています。





写真3 1996（平成8）年9月頃の国立駅南口



写真4 解体前の国立駅舎  
2006（平成18）年10月11日撮影

根の表面には経年による劣化が生じているのが分かります。さらに写真3から10年を経た解体前の様子が、上の写真（写真4）です。

光の加減や機材、撮影状況によって色味は変化して見えてしまうでしょうが、実際の屋根も経年劣化によって、気づかないうちに少しずつ色味が変化していたことでしょう。いつも同じように国立駅南口に佇んでいた「赤い三角屋根」は、実は風雨に耐えつつ、じっくり、ゆっくり、変化を遂げていたようです。

住民や国立駅利用者が想い描いた「赤い三角屋根」の色は、それぞれの想いの中に醸成され、定着していた色なのかもしれません。しかし、相応しき屋根の色が人々に想い描かれるほど、国立駅舎は、まちのランドマークとして意識された建物であったということは間違いないでしょう。



上：旧国立駅舎部材 着色厚型スレート鬼瓦（東北側）  
下：旧国立駅舎部材 着色厚型スレート瓦（北側）



旧国立駅舎内展示室 スレート瓦の常設展示の様子  
着色厚型スレート瓦

この駅舎も、JR中央線の高架化工事に伴って2006年12月には解体が完了し、その後国立市によって部材が保管されます。2020（令和2）年4月6日に国立駅南口にオープンした旧国立駅舎は、大切に保管されてきたこれらの部材を利用して再築工事がなされたものです。この再築において利用できなかった部材の一部について、僅かな数量ではありますが当館の所蔵資料として保存しています<sup>25</sup>。その中には、解体時にその役目を終えた屋根瓦が2点含まれています<sup>26</sup>。

この2点の屋根瓦の表面を観察すると、いずれも

25 国立市の担当課（国立市駅周辺整備課）の承諾を得て、2019（令和元）年12月27日に当館に受け入れました。この際一緒に受け入れた駅名表示板についても資料紹介をしていますので、併せてご覧ください。

「『赤い三角屋根』誕生—国立大学開拓の景色—」展 展示資料の紹介—8：国立駅の駅名表示、いつから駅舎壁面へ掲示？

当館 HP： <https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/20200528/>

26 これらの2点の屋根瓦については、2021年4月より当館1階で展示紹介いたします（展示期間：1ヶ月程度）。また、旧国立駅舎内の展示室では、旧国立駅舎部材が常設で展示されています。いずれの展示も、この機会に是非ご覧ください。



塗料が目立って剥落していることが分かります。瓦自体の素地が出ている部分や、黒っぽい汚れが付着している部分もあります。やはり経年による変化は、屋根の色味に幾らか影響を及ぼしていたようです。

瓦表面に残存している塗料には、濃い赤系の色味の部分が認められます。1988年6月中旬の塗り直しの後、その後2006年の解体までの間に再塗装がなされていなかったとすれば、この残存している塗料は、1988年のアンケート調査の結果を反映して塗り直された「赤さび色」の塗料である可能性が考えられます。

### おわりに

今回は国立市広報担当から移管された写真に基づいて、国立駅舎の屋根の塗り替え・塗り直しについてみてきました。

当館の所蔵する写真資料にあっては、この国立市広報担当から移管された資料が圧倒的な割合を占めています。当時の広報誌へ掲載する目的で撮影された写真が大量に移管されており、これは国立の地域史を紐解くのに大変有用な資料です。現在、古い年代のものから整理とデジタル化を適宜行っていますが、“お金”とマンパワーの制約、そして何より担当者の能力不足（ワタシのことです）が影響して、まだまだその端緒が開かれたばかりという状態です。従って、1988年という昭和の末の年代まで整理等の手が及んでおらず、今回は収納箱から移管当時のファイルを引っ張り出して駅舎の写真のひとつひとつ探すという、なんとも古式ゆかしい方法で探索をしました。そのため未検出分があるとは思いますが、現状では、明るい屋根色（オレンジ色）をま

た国立駅舎を取めた広報移管のカラー写真は、冒頭に掲載した写真と一連撮影の僅か4枚の紙焼き（ネガフィルムなし）しかありませんでした。しかもこれらの写真の撮影対象は駅舎ではなく、円形公園に咲いた花だったようです。その背景として駅舎が写り込んでいるのが幸いしたものです。

ちなみに、広報移管写真では1967（昭和42）年の市制施行時の祝賀式典や祝賀パレードを取めた写真からカラー写真が使用され始めています<sup>27</sup>。ただ、その後も市報はモノクロ版がメインであったことから、国立市の広報が撮影した写真は、1988年の時点でもモノクロ写真が主でした。そのような事情が、屋根塗り替えに関して市の広報担当が撮影をしていない一因なのかもしれません。

また、冒頭で紹介したとおり、1988年には当館は開館していませんでした。開館当初にあっても、屋根塗り替えの件はまだ6年前の出来事ではなかったため、資料収集の対象として意識されなかったのでしょうか。この国立駅舎の屋根塗り替えに関する資料は、当館にはほぼ無きに等しいという悲しい状況にあります。斯くいうワタシも、今回の調査を経なければ、意識せずやり過ごしたかもしれません。

新聞報道をみると、当時の写真がいくつも掲載されています。先に紹介した記事④の4色の色味サンプルが掲示されている写真（記事はモノクロ）の他、記事⑩には塗り直し前に屋根の水洗い作業をしている写真が、記事⑪にはいよいよ塗り直し作業が始まった写真が掲載されています。いずれも喉から手が出るほど欲しい写真ばかりです。

国立駅舎の屋根塗り替えと塗り直しの顛末については、新聞各社が多摩版・武蔵野版という地域密着



写真5 1988年5月頃の一連撮影とみられる8枚

27 市制施行の祝賀式典や市中祝賀パレードのカラー写真については、以前写真紹介をしています。そちらも併せてご覧ください。  
写真紹介-10「市制施行 市制祝賀式典『広報くにたち』No.176より」1967（昭和42）年1月23日  
当館 HP : <https://kuzaidan.or.jp/province/kuni-photo/photo-info/20171221-01/>



の紙面で、当時賑やかに報道していた話題でした。さらに、屋根の色味に関するアンケート調査の回収数は1,200通を超えています。それだけ駅利用者や市民が興味を抱いた話題でもあったわけです。しかも「昭和」が遠くなった(?)とはいえ、まだ30数年前の出来事です。ということは、市民の皆さんや当時国立駅舎を利用されていた方々の中には、写真を含め何かしらの資料を保管されている方がいらっしゃるのではないかと思います。しかも、この屋根塗り替えがなされる前々年、1986(昭和61)年にはあのヒット商品となった『写ルンです』が発売されていました<sup>28</sup>。カラー写真が誰でも、手軽に撮影できる世の中が到来していた時期でもあったのです。

4ヶ月弱の短い間ではありましたが、明るい色に塗り替えられた国立駅舎の写真がお手元にはりませんか？ また駅舎内で行われていたアンケート調査の様子を撮影されたりはしていませんか？ 国立駅舎の屋根塗り替えに関係した資料や写真などを探しています。何かしらでも情報がありましたら、是非ともくにたち郷土文化館までお知らせください。皆さんからの情報提供が大きな力となります。何卒よろしくお願いいたします。

【くにたち郷土文化館 連絡先】

HP : <https://kuzaidan.or.jp/province/>

☎ : 042-576-0211 FAX : 042-576-0216

(2021.03.26 中村記)



参考写真 再築された旧国立駅舎  
画像提供(3点とも): 国立市

28 世相風俗観察会編著『増補新版 現代世相風俗史年表』(河出書房新社、2009年3月30日)297・298頁に拠ると、『写ルンです』は1986年7月1日に富士写真フィルムより24枚撮り1,380円で発売。その年末までに150万個を売り上げたようです。